

■旭社（あさひのやしろ）

昭和 57 年 2 月 16 日国の重要文化財指定



旭社正面

【概要】

旭社はもと金毘羅大権現時代の金堂（こんどう）で、薬師如来を本尊として祀っていた。全国各地の崇敬講をはじめとする寄進により、起工以来 24 年を要して天保 8 年（1837）上棟した。落成は弘化 2 年（1845）、計画から約 40 年の歳月をかけて完成している。二層入母屋造、銅瓦葺。総檜（けやき）造とされ、屋根まで含むと高さ約 25m。四国最大規模の木造社寺建造物である。

上層板軒には卷雲を彫り、柱間、扉等には人物、鳥獣、花卉等を彫刻した豪壮な社殿。1 階の「旭社」の扁額（へんがく）は、正二位綾小路有長（あやのこうじありなが）の筆、2 階の「降神観」の額は、清国の翰林院侍読※（かんりんいんじとく）王文治（おうぶんじ）筆で清国人 劉雲台（りゅううんだい）の奉納。

※翰林院は清国の官庁のひとつで、詔書の起草などを行う重要な役所。侍読は教育や文書に関する役割を持っていたといわれる。王文治は科挙の最終試験で第三位（探花・たんか）という成績を修めた、今でいうエリート官僚である。

棟梁 吉田利右衛門、
綾九郎右衛門

（御本宮の棟梁 綾坦三（あやたんぞう）の父）

脇棟梁 荒川安蔵、池亀蔵



降神観の額

明和8年(1771)、第十代別当宥存(ゆうそん)が金堂を建築しようとしたが、着手には至らなかった。

第十一代別当宥昌(ゆうしょう)を経て、文化3年(1806)、第十二代別当宥彦(ゆうげん)がその志を継ぎ、薬師堂を廃して金堂建築の計画を定めた。金毘羅の香川半五郎・阿波の新浜善蔵の二人を発願主として計画を進めたものの、宥昌は文化4年(1807)、宥彦は文化8年(1811)に没し、着手を見ることはなかった。金堂再建にあたっては、金毘羅の秦半左衛門(はたはんざえもん)と多田屋香川治兵衛に講を組織させたが、なかなか軌道に乗らず、文化10年(1813)ごろからようやく建築用材などが順調に集まりだし、第十三代別当宥慎(ゆうしん)の代になって起工式を執り行うまでになった。建築材は遠く出羽地方から北前船に乗って回漕(かいそう)せられたという。

工事は途中、瓦を銅瓦に変更するなど若干の遅れがみられたものの、ゆっくりではあるが進んでいった。弘化2年(1845)の完成にあたっては、金堂御入仏開帳に続いて観音堂の御開帳も繰り上げて行われ、多くの参拝者でにぎわった。

『金堂寄進帳』によると約13万8千件の姓名の記載があり、寄進者は全国67ヶ国にも及ぶ。

総工費は銀2078貫217匁(もんめ)。

明治の神仏分離の政策により金堂は旭社と改称、神式に改められる。明治6年(1873)には須弥壇(しゅみだん)や柱の金箔も取り除くなど仏教色を排して現在に至る。

【建物の特徴】

近世には例の少ない大規模な二重仏堂。入母屋造、銅瓦葺。下重は正方形の桁行(けたゆき)五間、梁間(はりま)五間、向拝(こうはい)三間、軒唐破風付(のきからはふつき)、背面中央部に三間の張り出しを設ける。内部は背面の中央に縁を取り入れて神殿とし、唐破風を設けている。上重は方三間で、中央に棧唐戸を入れ、両側上を連子窓(れんじまど)としている。上重の竜と象の尾垂木(おだるき)や全面に雲文を彫る板軒など、随所にはめ込まれた彫刻等は江戸時代末期の特徴をよく示している。



上層の彫刻

【旭社（年表）】

- 明和 8 年（1771） 当時の別当宥存が金堂を建築しようと思ひ立ち、丸亀の佐野久大夫に発起させるが、翌年の洪水等で着手するには至らなかった。
- 寛政 11 年（1799） 十月、長崎本籠町 良蔵、清国人 劉雲台奉納の王文治書「降神観」額を菅政英宅まで届ける
- 文化 3 年（1806） 別当宥昌、発起し薬師堂を廃して金堂建築の計画を定める
- 文化 10 年（1813） 二月二十七日、金堂（旭社）起工式
- 文政 7 年（1824） 五月十八日、金堂本柱を建てる
- 天保 3 年（1832） 十一月十六日、金堂初重棟上げ
- 天保 8 年（1837） 四月八日、金堂二重目上棟
- 天保 11 年（1840） 九月十八日、金堂銅屋根平葺き終る
- 天保 13 年（1842） 八月、大坂西村屋愛助、金堂用材の椽百五本秋田から廻送する
- 天保 14 年（1843） 十月一日、金堂厨子上棟
- 弘化 2 年（1845） 二月一日、金堂成就、講元より引き渡さる
二月九日、金堂入仏
二月十八日～五月十日、金堂落成を記念して、観音堂の開帳（33 年ごとに行う）を 13 年引き上げて開催、宝物拝観
- 弘化 3 年（1846） 八月二十二日、金堂厨子塗装工事完了
十月一日、今夕裏堂より本尊入仏
- 明治 2 年（1869） 二月二十九日、古川躬行、金毘羅大権現の神式改正、神道への改祭を手掛ける
六月、旧金剛坊を威徳殿（いとくでん）、元金堂を旭社、三十番神社を石立社（いわたつのやしろ）とするなど末社の改称、創剱（そうしょう）が行われる。旭社には天照大御神、菅多和氣尊（ほんだわけのみこと）、武雷尊（たけいかずちのみこと）を祀る
- 明治 6 年（1873） 六月、旭社(旧金堂)の上段内陣を取除き、白木にて新社壇を作る
- 明治 6 年（1873） 七月、御祭神の内、菅多和氣尊・武雷尊の二柱を常磐神社（ときわじんじゃ）に奉遷、常磐神社の伊邪那岐・伊邪那美の二柱を旭社に奉遷。御祭神は高皇産靈神（たかむむすびのかみ）・天御中神（あめのみなかぬしのかみ）・神皇産靈神（かみみむすびのかみ）・伊邪那岐神・伊邪那美神・天照大御神・天津神（あまつかみ）・国津神（くにつかみ）・八百万神。
- 明治 15 年（1882） 一月二十四日、神官の教導職兼務を廃止するのに伴い、明治 6 年に旭社内に設置した講壇を撤去する。

※教導職は、明治政府の宗教強化政策で、国民を教え導くために設置され、全国社寺の神職・僧侶などを無給の教導職とし説教を行った。金刀比羅宮では旭社に説教場が設けられた。

計画から落成まで 39 年

起工から上棟
まで 24 年

明治 29 年 (1896) 一月、旭社従来の社壇を廃して殿内に靈殿を新築。旭社内陣改造
大正 6 年 (1917) 四月七日、旭社臨時大祭
大正 7 年 (1918) 四月一日、旭社大祭 (以後、恒例として執り行う)

昭和 57 年 (1982) 二月十六日、旭社、表書院及び四脚門が重要文化財に指定

【主な修理】

明治 41 年 (1908) 七月十日～明治四十二年五月三日、旭社屋根修繕

平成 4 年 (1992) 一月二十四日～三月二十日、旭社災害復旧工事
(平成 3 年台風による)

平成 17 年 (2005) 三月十四日～六月三十日、旭社屋根修繕
(平成 16 年台風による災害復旧)

令和 7 年 (2025) ～約 18 年の歳月をかけて半解体を伴う大規模な保存修理工事に着手

【参考資料】

- ・『金毘羅庶民信仰資料 年表編』
- ・「天保八年建立のこんびらの金堂－いまの旭社について」大崎定一、ことひら 28 号
- ・「金堂造営の発願から上棟・入仏までの諸問題－巧緻な講組織の総括」草薙金四郎、ことひら 37 号



銅板表面墨書残存状況



下層屋根の特定範囲における銅板表面の黒色



①板軒彫刻 (雲渦紋)



②南面妻飾り彫刻



③北面妻飾り彫刻



④二層 尾垂木彫刻



⑤二層 琵琶板彫刻



⑦一層 木鼻彫刻 (獅子)



⑥二層 琵琶板彫刻



⑧一層 木鼻彫刻 (獅子)

様々な
外装
彫刻